

IPM技術体系の普及による赤ピーマンの品質向上

活動期間：平成25年度～（継続中）

○安田町唐浜地域の赤ピーマン部会（7戸）では、天敵を利用した防除に取り組んでいるが収穫初期のアザミウマ類の被害が問題になっていた。

○農業振興センターでは、地域版のアザミウマ類防除マニュアルを作成し、改良・普及させることで、赤ピーマンの品質向上を目指した。

○その結果、10月～12月の秀品率が著しく向上した。
(H24年度69.2%→H26年度85.1%)

具体的な成果

普及指導員の活動

1 秀品率の向上

■実証試験の結果をもとに、「地域版アザミウマ類防除マニュアル」を作成した(H25)。

■9月中の天敵導入や防虫ネットの設置が100%徹底された(H26)。

■10～12月の秀品率が著しく向上した。

平成24年度69.2%（取り組み前）

→平成25年度80.7%→平成26年度85.1%



ピーマン被害果

アザミウマを捕食する
タイリクヒメハナカメムシ

2 マニュアルの改良

■タイリクヒメハナカメムシの温存植物にはスカエボラが有望と考えられた。

■タバコカスミカメは赤ピーマンへの被害もなく、アザミウマ類の密度抑制が可能であった。

■実証結果から、「地域版アザミウマ類防除マニュアル」に天敵温存植物(スカエボラ)の利用とタバコカスミカメの利用を盛り込んだ。

平成25年

■アザミウマ類の発生状況把握

■天敵マニュアル(案)作成

■防除資材(防虫ネット)導入を推進

■天敵防除に関する勉強会の開催(4回)

平成26年

■マニュアル(案)をもとに、個別指導や部会勉強会で基本技術の指導を行う。

■より安定的な防除技術にするため、関係機関でプロジェクトチーム会を設置。

■天敵温存植物と新たな天敵昆虫の実証ほを設置。

■新しい天敵昆虫に関する勉強会(1回)

■マニュアルの改良

平成27年

■改良したマニュアルの周知

■新たな侵入害虫(チャノキイロアザミウマ)対策、病害対策に関する勉強会(2回)

普及指導員だからできたこと

・高度な専門技術を有する普及指導員だからこそ、アザミウマ類の防除案を提示できた

・地域の農業者と日頃から密接な関係を持つ普及指導員だからこそ、部会員全員での取組にすることができた。

I P M技術体系の普及による赤ピーマンの品質向上

活動期間：平成 25 年度～継続中

1. 取組の背景

唐浜地域の促成赤ピーマン（1.7ha、7戸）では、タイリクヒメハナカメムシ（以下タイリク）とカブリダニ類を主体とした天敵利用に取り組んでいるものの、年内のアザミウマ類の被害が甚大であることが問題となっています。

そこで、収穫初期のアザミウマ類の被害を低減するため、地域版のアザミウマ類防除マニュアルを作成・普及するとともに、他の病害虫も含めたより効果的な技術を検討することで、赤ピーマンの品質向上を目指します。



ピーマン被害果

2. 活動内容（詳細）

＜平成 25 年度＞

○前年度の予備調査の結果からアザミウマの増発時期を考慮し、天敵放飼時期や農薬使用時期等を示したアザミウマ防除案を作成した。また、タイリクヒメハナカメムシとその餌にもなるククメリスカブリダニを組み合わせた実証ほ及び土着天敵（タバコカスミカメ）が発生したほ場で天敵と害虫（アザミウマ類）の発消長調査を行いました。

○作成した防除案をもとに、防虫ネット設置や9月中の天敵放飼などの天敵防除の基礎技術を推進するため、個別巡回や現地検討会等で技術指導をしました。

○天敵防除に関する勉強会を開催しました（4回）。

＜平成 26 年度＞

○前年度に作成した「地域版アザミウマ類防除体系マニュアル」をもとに、個別指導や部会勉強会で天敵利用の基本技術の指導を行いました。

○タイリクの定着が安定しないため、関係機関とプロジェクトチームを立ち上げ、天敵温存植物（スカエボラ、スイートアリッサム、スイートバジル、コバノランタナ）や新規天敵（クロヒョウタンカスミカメ、タバコカスミカメ）の実証試験を行い、マニュアルに組み込む技術を検討しました。

○新しい天敵昆虫に関する勉強会を開催しました（1回）。

＜平成 27 年度＞

○改良したマニュアルを部会勉強会で周知しました。

○新たな侵入害虫（チャノキイロアザミウマ）の防除対策について情報提供を行いました（2回）。



勉強会の様子

3. 具体的な成果（詳細）

＜平成 25 年度＞

○7戸中3戸の農家は1月中旬までアザミウマの被害を大きく被ることなく防除

できました。防除に成功した3戸では、タイリクヒメハナカメムシを9月中に導入していることや基本的な天敵利用技術ができていることなどの共通点がありました。これらの実証結果をふまえて、「地域版アザミウマ防除マニュアル」を作成しました。

○部会全体の技術が向上し、10～12月の秀品率が向上しました（H24年度 69.2%→H25年度 80.7%）。天敵防除に絞った勉強会を4回に分けて丁寧に開催したことで（H24年度2回→H25年度4回）、防除技術や天敵温存植物への関心が高まりました。

＜平成26年度＞

○H26年度は全戸において1月中旬までアザミウマ類の被害はほとんど見られませんでした。9月中の天敵導入や防虫ネットの設置が全生産者に徹底され、部会全体の防除技術が向上した結果、10～12月の秀品率が著しく向上しました（H25園芸年度 69.2%→H26園芸年度 80.7%→H27園芸年度 85.1%）。

○試験した天敵温存植物のうちスカエボラは有望と考えられましたが、過湿に弱く、長期間維持する方法の検討が必要です。クロヒョウタンカスミカメは年内の定着が困難でしたが、タバコカスミカメはアザミウマ類の密度を抑制でき、赤ピーマン果実への加害もなかったため、防除体系に組み込んでマニュアルの改良をしました。



アザミウマを捕食するタイリクヒメハナカメムシ

4. 農家等からの評価・コメント（安田町公文氏）

I P M技術に対する意識が向上し、勉強会で紹介された技術を自主的に導入する農家がでたり、部会主催の天敵利用に関する講演会が開催されたりしました。天敵中心の防除体系でも、品質は従来と遜色なく、化学農薬に頼らない防除体系が確立されたことで、省力化にもつながりました。

5. 普及指導員のコメント（農業改良普及課長・榎本哲也）

今回の取り組みはアザミウマ類中心の防除体系の組立てだったが、赤ピーマン栽培では、まだ未対策の病害虫（ハスモンヨトウ、アブラムシ類、コナジラミ類、うどんこ病等）があり、今後はそれらを含めた総合的病害虫管理技術に組立てていく必要がある。今後でもできるだけ化学農薬に頼らない防除技術を組立てるように、支援していく。

6. 現状・今後の展開等

- ・新たな侵入害虫(チャノキイロアザミウマ)に対する防除対策
- ・うどんこ病等の病害対策
- ・他の害虫（アブラムシ類、コナジラミ類、ハスモンヨトウ等）の密度抑制対策
- ・これらを組合せた総合的病害虫管理技術の組立て